

創立100周年記念

# 世紀のあゆみ



和歌山県立有田中央高等学校

2006年11月

有田川をはさんで南と北に山脈を配した中紀のこの地は、昔から「吉備の野」と呼ばれていた。温暖な気候でさまざまな農作物の栽培に適している。とりわけ北岸の斜面は山頂近くまで開墾され、ミカンを栽培している。江戸時代から、有田ミカンとして知られたこの農作物の栽培技術を支えてきたのが、わが校の役割であったと言える。事実、有田地方のみならず海草・日高地方の農家には本校の卒業生が多く、本校生の郷里への定着率は非常に高い。

創立当時「吉備実業学校」といったわが校の歴史は、百年前の明治40年までさかのぼる。当時は日露戦争が終わった直後で、世界に顔を出したわが国は富国強兵、殖産振興を叫び、漸く近代化が根づきつつあった。

戦勝気分に湧くわが国の産業界は変わり、工業の機械化が進んだが、一方、農業は旧態依然として近代化から取り残されていた。地主と小作の関係も改善されず、生活水準はさきわめて低かった。そんな農業を嫌い、離農して都市に移り住むという風潮が生まれ、女子のなかには農家に嫁ぐことを嫌うという、まるで昭和30年代以降のような世情であつたらしい。そうした農業の危機を憂い、近代的な農業技術者を育成しようと走り回った男がいた。

勝丸一視。本校の前身である吉備実業学校の生みの親、初代校長となった人物である。



大正4年第7回卒業式



みかんの収穫



修学旅行 江の島



農業実習風景



当時の職員



運動会



大正時代の校舎



明治41年 学校日誌



実習風景

## 100周年万歳

98、99、100期生のみなさん、栄えあるミレニアムを、共に喜び、分かち合えること、感慨一入であります！本校に赴任して4年目、本当に、素晴らしい節目に巡り会えて、心より嬉しく思います。

100年前の明治40年といえば、殖産興業にひた走る、わが国近代化の勃興期ではありましたが、期待していた日露戦争勝利による賠償金を獲得できず、初めて経験する不況の真っ只中でした。そんな時、一人近代化の波に乗り遅れた農村部では、若者達は職を求めて都会へと移り住んで行ったのです。これに危機感を覚えた地元の藤並・田殿・御霊の三村は、地元農業近代化のため、人口流出を食い止めるために、農業学校を組合立で結成したのです。それが本

学校長 瑠東 東治

校の前身である吉備実業学校です。乏しい予算を割いて将来のために、教育に多大な投資を行った、先人達の将来を見通す力は素晴らしいものでした。

爾來一世紀、世の転変に即応しながら、先輩達が営々と築いてくれた汗と涙のお陰で、現在のわたくし達の愛する母校が存在するのであります。改めて歴史の重みに思いを致さねばなりません。そして、わたくし達は100年後の後輩達に、しっかりとバトンを渡さなくてはなりません。それが伝統というものであります。

有田中央高校に、永久に栄えあれ！ そして、100周年万歳！

20世紀初頭、日本は大国ロシアを破り、また第一次世界大戦では、まれに見る好景気で日本経済は大きく急成長を遂げた。しかし大戦が終結して諸列強の生産力が回復すると、日本の輸出は減少して不況が日本を襲うことになる。戦後恐慌、金融恐慌、そして戦前最悪の昭和恐慌。この恐慌は戦前の恐慌の内でも深刻なものであった。イギリス・フランス・アメリカなどは植民地囲い込みによるブロック経済で建て直しを図ったが、そのような植民地を持たない日本などは深刻な経済不況に陥った。やがて満州は日本の生命線であると主張され、軍の中国進出を押し進めてしまう要因のひとつとなった。

昭和16年大東亜戦争に突入するや、教育も戦時体制に総動員され、当時の文部省は『臣民の道』を刊行し、聖戦を強調し、勤労動員をはじめた。国民は一億一心総力をあげたが、度重なる空襲により児童の被災、疎開となり、正常な教育は行われず、学校としての機能を失った。



校庭に設置された奉安殿



正門前に立つ銃剣姿の兵士



軍事教練



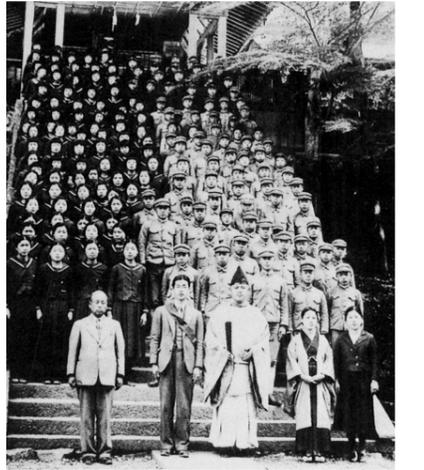
ヤギと一緒に記念写真



鼓笛隊



当時の女子学生実習風景



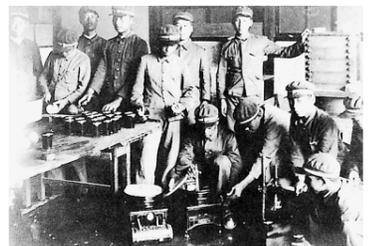
昭和19年 生徒と共に出征職員員の祈願



当時の女子生徒



グライダー祈願



昭和17~20年 農業実習

## 勝丸一視と吉備実業学校

わが校の歴史の中で二人の故人を抜きには語れないが、一視はその一人である。彼については、別項で詳述するが、明治3年、有田郡田殿村大字尾中 で生まれた。明治21年に和歌山県尋常師範学校に入学、卒業後22歳で第一田殿尋常小学校訓導を経て31歳で鳥屋城高等小学校訓導兼校長になった。

一視は農業地方の出身であったため、師範学校在学中も特に農業に興味があったらしく、農業に関わる学科や実習には特に熱意を注いで、研究を深めた。

卒業後、高等小学校に奉職しても自ら望んで農業科を受け持ち、児童に農業上の趣味を与え、かつ労働が神聖なものであることを伝えようとした。

しかしながら、当時の時勢の風潮は一視の理想にほど遠いものであった。華奢を求め虚栄を

喜ぶ傾向が、この地方本来の勤儉質実の習慣を崩し始め、男子は中学校に入りながら中途退学し、家業も継がず、この地方の純良美風を害する者が増え、女子は虚栄に馳せて農家に嫁ぐことを厭うものが年々多くなっていった。

一視は、一部児童のために高等小学校を存続すること、大部分の児童のために適切な実業教育を施すために、乙種程度の農業学校を設置することを提案し、関係三村長に協力を依頼した。

時勢の傾向を憂えて、将来のあるべき姿を模索していた村長らはこの提案に同意、組合会議全会一致で設置が可決された。明治39年のことである。こうして明治40年3月、設置の認可を受け、同年4月、事実上吉備高等学校が吉備実業学校として開校されるのである。

これは時勢の流れによるところも大であるが、一視がこの地方の前途を観破して、実業教

育の必要性を見据え、固い意志を持って熱意を注ぎながら東奔西走した結果であると同時に、一視自身が長年この地に奉職して人々の深い信頼を得ていたからこそ、その思いが正しく理解され、実を結ぶことができたと言える。

一視は職員を総督して創立間もない学校の運営を行いながら、学校組合間の連携を強くするために数々の働きを為した。こうして学校の成果は年々上がり、県下屈指の学校に数えられるようになった。また一視の教授管理訓練の方法がすばらしく、他の模範に値するということが県から表彰されている。

このように一視は郡内の教育事業に力を尽くし、常に郡内小学校教員の尊重を受けていた。また、一視の教訓を受けた数百人の卒業生のうち、進んで各種の学校に入学した者も、家業に従事した者も常に一視を敬慕し、音信を絶つことがなかった。

戦後、軍事色や占領政策に合わない部分を墨で塗りつぶした古い教科書を使って、民主主義に生まれ変わった教育がしばらく続く。全ての価値観が逆転した混乱のなか、教える側の教師も大変だったと思われる。

戦後教育の入り口はストから始まった。それは先に触れた戦争中のストやこの後に見られた授業放棄とは全く異質な、一度は潜り抜けねばならぬ関門と言えようか。個人の権利や幸せを一切圧殺して、ひたすら天皇のため国のために死ぬることを教えていた教師が、一転して民主主義を説く姿に、激しい不信を抱くのは当然であったろう。そうして全国的に中学校ではストの洗礼を受けた。共通点は、ストライキの根拠が往々にして些細なことであったこと、生徒側が一方向的に優位であったことであろう。



昭和27年品評会



平松太一氏の功績

昭和34年7月28日、県立医大病院で平松太一吉備町長が72年の生涯を閉じた。平松太一は吉備高校（吉備実業）の大恩人である。学校のよきスポンサーとして数々の援助を続けてきた。父、熊次郎もまた、吉備実業創立にあたり勝丸一視を大いに助けたと言われている。太一の葬儀は吉備高等学校講堂で8月2日、町葬をもって行われた。

平松家は学校にほど近い清酒醸造業「金葵」である。明治20年9月11日、平松熊次郎の長男として生まれた。二代目の太一は和歌山中学校（現桐蔭高等学校）を卒業した後、家業を継ぐため大蔵省（現財務省）の醸造学校において学び、卒業後は帰郷して家業を継いだ。後に旧藤並村長（昭和9年から18年）を務め、さらに初代吉備町長、県会議員となった人である。かねてより農業の振興、農家の経済の安定に尽力し

ていた太一は、早くより農業教育に意を注ぎ、吉備実業学校の発展に大きな役割を果たした。

熊次郎から受け継がれてきた平松家の家風は、自分や家族の利益より、地域のためにできる限りのことをして、尽くすというものだった。経済的に恵まれた環境であり、地域に対して、金銭の面でも多くの貢献をした。「太一は政治家として、町に必要な事業には個人の資産を持ち出してでも行った。水害の時も自分の土地を寄付した。龍雄（太一氏長男）も自分の時間やお金を削って尽くしたが、家としてそういう流れがあった。」という話を聞く。

太一は若いころから家業のかたわら、学校（吉備実業）に出入りし、教師たちと親交が深かった。家業の技術を生かし、ミソ、しょうゆの醸造の講師として、吉備実業の教壇に立ったこともある。

また太一は野球が大好きだった。学校に野球



校舎玄関



授業風景



当時の生徒達



七・一八水害



藤並駅にて



実習風景



体育の授業



昭和29年卒業式

を勧めたのは40歳を超えたあたりで、野球部の遠征費などの面倒をみた。大正末から昭和初めごろ、吉備実業でも野球が始まったが、これは太一の援助のおかげだという。彼の家に「昭和2年4月、選手卒業記念」と記した写真が残っている。野球部の生徒は、練習の時の太一の差し入れを楽しみにしていたという。他にも、遠方から入学してきた女子生徒には自宅の一部を下宿として提供したり、女子のテニス部を援助するなどしている。

太一の援助がどれほどにのほほか、学校もつかみ切っていない。が、主なものを挙げると、実習農地の提供、図書館新設、校舎建設資金の提供など相当なものがある。「吉備のスポンサー」と語り継がれるゆえんである。

昭和23年、戦後の学制改革で小学区制が敷かれ、一学区に一校が置かれることとなり、吉備高校では普通科と実業科を併設したが、普通科はなかなか定着しなかった。ちょうど10年後の昭和33年には、普通科が廃止される。あたかも建学の基本精神に立ち返るように、農業教育（女子は家庭教育）中心の学校に戻っていくことになる。

職業高校への巡回は28年に始まった。この年から柑橘園芸科と農業家庭科（翌29年から家庭科）が募集を始めた。柑橘園芸科は、創立当時の園芸科の血を引く学科であることはいままでのない。

この動きは、ミカン栽培が農家に現金収入をもたらす将来有望な農業経営と注目され始めたことと大きく関係する。「ミカンは金の成る木」とも言われた。この年の「七・一八水害」で、有田地方の多くの田畑が流された。この災害を契機に水田のミカン転作が始まるのである。

33年、小学区制の撤廃とともに普通科は募集を停止。35年春、最後の普通科卒業生を送り出して吉備の「戦後」が終わった。



冷蔵貯蔵施設での実験風景



品評会・文化祭



昭和37年 生石山登山

校門前の桜並木

当時養護教諭であった藤原ツタ子先生（昭和34～48年度在職）。柑橘園芸科には下宿生があり、その生徒達の世話もよくされていたという。先生は養護教諭でありながら、園芸が趣味であったことから、園芸部も担当していた。先生にとつての初めての卒業生であった34年度生の部員が卒業の記念にということで学費の残りを持ち寄ってくれ、そのお金を遣って苗を買い、学校の正門前の道路脇に一緒に植えた（以上、藤原ツタ子先生談）。

それから40年あまりの間、その時々の生徒や職員が見事な桜の花の下で、うらかな春を楽しんだという。残念ながら道路拡張等のため数本は切られてしまい、往時の華やかさはなくなっているが、毎年入学式の頃には満開の薄ピンクの花をつけ、職員や生徒、付近の住民の目を楽しませてくれており、今も本校の自慢の一つ

となっている。

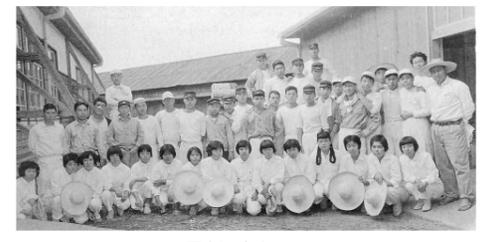
庭園の鯉と生徒たち

正門の右手にコンパクトな日本庭園がある。昭和44年度卒業生が寄贈してくれたものである。その庭園の大半を占める自然石ばかりで造った池には、錦鯉がゆったりと泳いでいる。この自然石は昭和23年併設中学校卒業の貞俊郎氏によって寄付された白崎の石で、造園を請け負ったのは町内で造園業を営む三木久和氏（昭和28年卒普通科第4期）である。この池は、今も、正門の一角にほっとする空間を提供してくれている。

しかし、昭和63年頃には池の底に10センチ以上のヘドロが溜まり、生き物がその中へ入り込むようになっていた。その状態を見かねた職員がいた。錦鯉の鑑賞やふ化の趣味を持っていた。「種」を抜き、水を入れ替え、「自然濾過装置」



授業風景



男女混合クラス



体育大会



予餞会



予餞会

昭和23年新制高校、県立吉備高等学校として出発し、33年に職業高校としての原点へ還っての再出発、その後、50年代半ばまでの20数年間は、地域農業有田みかんの隆盛や有田地方の繁栄を背景に、本校が地元を支えられながら地域の学校として成長し、一定の成果を上げ、保護者や地域の期待に応えてきた時代と言えます。

しかし、昭和40年代から生産過剰によるみかんの価格の大暴落、それともなう若者の農業離れ、農業後継者の減少化が顕著になってくる。また昭和48年に我が国は第1次オイルショックに見舞われ、高度経済成長は終わりを告げることになる。

一方、大学制度にも変化が起き、学歴偏重の風潮が起こるとともに中学生の普通科志向が強まりはじめ、職業高校であった本校は変容を迫られるようになっていく。吉備の地域でも大学への進学希望者が増えてくる中で、この地域で普通科の教育が受けられるようにと、54年頃から本校への普通科設置の機運が高まり、校舎の全面移転の検討とも相まって、本校沿革史上での大きな節目を迎える。



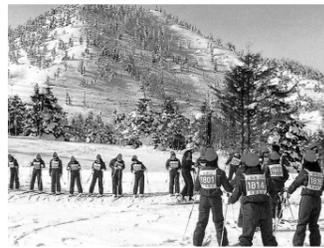
モニュメント「団結」



ビッグアート



大会パンフレットより



80周年記念式典



修学旅行



80周年記念式典



さんフェス和歌山'95



第50回選抜高等学校野球大会入場行進



校舎新築

県外実習・交換実習

柑橘園芸科では積極的なミカン栽培指導が行われた。昭和34年秋には静岡県へ、35年には愛媛県へミカン栽培農家を見学に行っている。また九州への修学旅行の際には、熊本県の農業試験場見学も実施している。

昭和40年7月から交換実習が始まった。当時生産量で1、2位を競っていた静岡県と愛媛県の柑橘栽培を学ぶ生徒と本校の生徒達との交換留学である。

40年代当初は静岡農業高等学校との交換であったが、半ば頃からは愛媛大学附属農業高校との交換実習に変わっていった。これは、当時静岡では普通温州みかんが主流であったが、和歌山では次第に早生温州・中生温州が主流になりつつあり、それが栽培の中心であり、また中晩柑の栽培もされていた愛媛県での実習のほうが実りが多いと考えられたからである。

実習期間は往復の日数とあわせて8日間。中5日、基本的には1軒に2〜3人、一緒に現地の農家のお宅にいわゆるホームステイの形でお

世話になり、生活をともにしながら、農作業の指導を受けた。毎年、参加者は20〜30名いたものの引率教諭は一人で、おもに引田玉男教諭(昭和45年〜51年度在職)や谷口充教諭(昭和45年〜49年度在職)が担当した。愛媛大学附属農業高校校友会の研修所に泊らせていただき、さらに単車をお借りして、朝から夕刻までそれぞれの生徒達がいる農家を巡回して回ったという。

この実習の形態は、通り一遍の見学でなく、農家に密着して考え方や習慣まで、土に根ざした技術のすべてを体験させようという狙いがあった。この交換実習は49年まで続いた。この時代の柑橘園芸科卒業生には、この体験を印象的な思い出として語られる方が多い。

昭和24年から43年まで生徒ホールは「ていあん食堂」と呼ばれていた。これは食堂の主「ていあん」こと平松貞次さんが開いた食堂だからである。貞次さんは本校の卒業生で、学校のすぐ近くで鮮魚店を営んでいたが、47歳の時に生徒のためにすることがしたいという気持ちで食

堂を始めた。建物は学校のものだったが、調理器具や食器類はすべて貞次さんが用意したものだった。

貞次さんの娘で食堂を手伝っていた滝本恵美子さんは次のように語っている。「私の父親は家のことはほったらかし、商売のこともほったらかして、いつも学校のことばかり考えている人だった。品評会の時などは何日も前から落ち付かず、学校のことがばかりしていた。」

また当時のエピソードとして、貞次さんはお金を持っていない生徒には「貸しとくよ」と気安く食べさせ、お金をもらわないことも多かったらしい。

当時の主なメニューはうどん。このうどんは大量の煮干しでダシを取り、非常においしかったことだ。売店のコーナーもあり、パン、牛乳、アイスクリーム、ジュースなども買うことができた。教師もよく利用しており、ご飯とおかずもつくっていた。

ちなみに息子の平松弘之さんも在学中には昼休みに食堂を手伝っていたらしい。

明治40年、「一般ノ生業ハ概ネ農ニシテ卒業生ノ大部分ハ何レモ家業ニ従事スルト近時、社会ノ悪風潮ガ純良ナル我が農村ニマデ侵入シ来リテ前途憂慮スベキノ兆アリシトニヨリ一部児童ノ為ニ高等小学校ヲ存置スルト共ニ大部分ノ児童ニ地方適切ノ教育ヲ施スベキ機関ヲ設クルハ急務ナリ」と、勝丸一視の奔走により吉備の地に生まれた組合立吉備実業学校以来、90年。ここまでの大きな節目を数えると三つの変革期があった。昭和23年の普通科実業科併設の県立吉備高等学校の始まり。昭和33年の職業高校への回帰。そして昭和58年、再びの普通科併設の総合高校としての出発である。

平成9年春、本校は4回目の大変革を経て、新しい時代を迎えることになる。有田中央高等学校総合学科としての新生である。



入学式



卒業式



授業風景



授業風景



品文祭



授業風景



カルチャー園芸



新制服



品評会のにぎわい

学校行事の回数と学校創立年数とが同じとは、非常に貴重な記録と言えよう。歴史が浅い場合はともかく、敗戦をはじめ様々な変動をくぐってきた百年の歴史の中で、やむを得ず中止したり障害が出来たりするものなのに、一度もとぎれなかったのは奇跡としか言いようがない。

品評会は吉備校の重要な伝統行事であり、この地方の最大の祭りであり、誇りでもある。有田地方のみならず郡外からの参観もあり、時には嫁がしの見合いの場に利用されたこともある、と言われたほど。それほど賑わい、愛され、育てきたのである。人材育成ばかりでなく地方産業振興のためにも、農産物を一堂に集め、優劣を競い合わせる一種の産業博覧会は、大きな意味を持っていた。戦後、ここで優秀な成績をおさめて、新品種と認められ、有田のブランド

品種として残っているミカンもある。また、作物の展示ばかりでなく、農器具や耕作機械の新製品展示も多数あって、農作業を助けた。

出品品目は時代と共に変わり、初期は穀物、野菜が大部分であった。とりわけ戦前戦中は米・豆類の展示が多く、穀物だけで大きな会場を埋め尽くした光景を覚えている。戦後は「金のなる樹」としてミカン栽培が盛んとなり、その展示が中心となった。出品点数は一万を超え、全ての教室・講堂を埋めつくし、人出も数万を数える。

生徒達もたくさんの業務や役割を分担した。「吉備だんご」作り(地域の方々も手伝ってくださった)や駐車場、自転車預かり、各展示場の担当などがあり、大変だったようではあるが、品評会の前後1週間は準備や片付けのため授業がなくなり、非常に楽しく、また何よりもたくさんの人々に自らの学校を紹介できることで、

誇りも持てたと卒業生は語る。

生徒の数の力が大いに発揮されたのは、何と云っても品評会に展示していただく農産物集めだった。この頃は地域の人たちはどの方も非常に協力的で、品評会に出品するために、と特別に苦心して作物を作る農家もあり、地元の生徒が集めに来るのを心待ちにしてくれていた。また多くの農家が入賞をねらい、大きな賞を受賞すると、業者が買い付けに來たりして、生産者としては大変な名誉ともなったようだ。

